

# 現代日本語の動詞由来の《後置詞》をめぐって\*

— 構文的な機能からの後置詞のタイプ分けをめざして—

河在必\*\*

## 〈 Abstract 〉

### On Postpositions Derived from Modern Japanese Verbs : Aiming at Classification of Postpositions from Syntactic Functions

Some verbs in modern Japanese get deverbalized and become postpositions. In such cases, the source verbs for postpositions take the gerund or conditional form, which is basically used in a non-finite position. Past studies have recognized the existence of postpositions that originate from these two word forms, but they have not focused on the differences in the syntactic linkages that arise depending on the word form.

This study classified postpositions into four types according to their syntactic linkages and then identified the type that those postpositions originating from the gerund form and those originating from the conditional form belong to.

Through this analysis, it was found that postpositions originating from the gerund form of verbs create linkages at the word level, and more specifically at the verb and adjective level, with verbs playing a central role. It was also found that postpositions originating from the conditional form of verbs do not create linkages at the word level but at the sentence level.

The differences in linkages depending on the word form of verbs come from the syntactic features of such word forms. The gerund form has evolved to link two verbs that represent movement, and this feature appears to remain after grammaticalization. On the other hand, the conditional form is intended to link two sentences that represent an event, thus creating sentence-level linkages after grammaticalization.

Field : Syntax

Keywords : Postpositon, Grammaticalization, Conditional verbal form, Gerund form, Deverbalization

## 1. 本稿の目的

現代日本語には、例(1)～(3)の「めぐって」「おいて」「ついて」「向かって」のように、動詞の《中止形》(または、《連用形》、《テ形》)から発達して構文的な機能を果たすようになった形式がある。

\* This work was supported by the Ministry of Education of the Republic of Korea and the National Research Foundation of Korea (NRF-2017S1A5A8021855), and Hankuk University of Foreign Studies Research Fund.

\*\*韓国外国語大学 助教授、現代日本語文法

- (1) たとえば、ある理論をめぐって議論するときにも… (下略) (脳)  
 (2) ここで、近年の日本において著しい「脳ブーム」について考えてみましょう。(脳)  
 (3) ピアッシングは、そんな十代が「このからだはわたしのものであって、もうあなたがたのものではない」と、親に**向かって**、大人たち**に向かって**、宣言する行為だと考えられはしないか。  
 (てつ)

これらの形式を、永野 (1953) では、いくつかの語が複合して、全体として助詞、助動詞として機能するようになっているとして、「をめぐって」「において」「について」「に向かって」を《複合辞》とよんでいる。この《複合辞》の規定のもとで、森田・松木 (1989)、松木 (1990)、藤田・山崎 (2006) など、多くの研究がなされている。

一方、上記の研究とは別の流れを汲んでいる鈴木 (1972) では、「おいて」「ついで」「めぐって」を動詞の中止形から発達した《後置詞》と位置づけ、以下のように規定している。

これは、単独では文の部分とはならず、名詞の格の形 (およびその他の単語の名詞相当の形式) とくみあわさって、その名詞の他の単語に対する関係をあらわすために発達した補助的な単語である。日本語の後置詞は、英語などヨーロッパ語の文法の前置詞 preposition に対応するものであるが、名詞に対する位置が逆なので、後置詞 postposition とよばれる。

(鈴木1972: 499)

この規定のもとで、高橋 (1983a)、木村 (1991) などの研究がなされている。

鈴木 (1972) の観点から、例1の「めぐって」の構文的なふるまい方と他の単語に対するむすびつき方をみると、「めぐって」は「ある理論を」とくみあわさり、「ある理論」と後続する「議論する」との関係、つまり、「ある理論」が「議論する」の表す活動の対象であることを示す。

そして、高橋 (1983b) によって動詞の条件形からも後置詞が発達していることが指摘されている。しかし、動詞の条件形から発達した後置詞の場合、名詞とむすびつく単位が変わってくるようである。視覚活動を表す動詞「みる」の条件形である「みれば」、言語活動を表す動詞「いう」の条件形である「いえば」が後置詞化している例をあげる。

- (4) 彼らからみれば僕はふがいない奴かもしれない。(無印)  
 (5) もちろん、伸子は世間の水準からいえば「金持ち」であって、宝石だの着物だの、相当にいいものを持っている。(シン)

「みれば」「いえば」が名詞の格の形「彼ら」「世間の水準から」とくみあわさって、「僕」に対する評価、「伸子」に対する判断を述べるときの《観点》や《基準》をさしだしている。言いかえれば、「彼ら」「世間の水準」がむすびつくのは、単語以上の単位の「僕はふがいない奴かもしれない」「伸子は金持ちである」である。

こうしてみると、中止形から発達した後置詞は単語と単語とをむすびつけており、条件形から発達した後置詞は単語と単語以上の単位とをむすびつけているといえそうである。

しかし、「(～から)みて」「(～に)とって」の場合、中止形から発達したにもかかわらず、名詞がむすびつくのは、単語以上の単位で、例4、5の条件形から発達した後置詞と同じである。

(6) もし、世界の中の事象を規則的、ランダム、偶有的の三つに分けたとすれば、脳の感情のシステムから見て最も興味深い対象は、偶有的なものです。 (脳)

(7) 人間にとって美への願望は相当に根深いものである。美とは価値の観念であるから、放っておいてもある感覚的な基準を生み出す。つまり美醜の「差」を意識せざるをえなくなる。(てつ)

そうすると、仮説として「中止形と条件形から発達した後置詞の構文的な機能は異なっている。前者は単語と単語とをむすびつけ、後者は単語と単語以上とをむすびつける。しかし、形式的には中止形だが、構文的な機能は条件形に近い場合と、一方ではその逆の場合がある」というようなことが考えられるだろう。

管見のかぎり、複合辞や文型及び後置詞の研究をみると、特定の形式の意味・用法に関しては様々な記述がなされている。しかし、特定の動詞の語形が動詞らしさを失って文法的な機能をするようになったときの変化を捉えようとする、文法化の観点からみれば、今のところ、もとの動詞の文法的な性質と後置詞の用法との相関性や構文的な機能の違いによるタイプ分けなど、より広い観点からの考察までは行われていないようである。

そこで、本稿では、ひとまず、いくつかの代表的な後置詞を選び出し、動詞由来の後置詞のもっている構文的な機能を確認し、もとなる語形と後置詞の用法との相関性からタイプ分けを試みたい。

## 2. 先行研究

先述しているように、動詞由来の後置詞、複合辞をめぐっては、数多くの研究もされている。永野(1953)をはじめ、森田・松木(1989)、藤田・山崎(2006)などの複合辞の研究がある。一方、後置詞については、鈴木(1972)、高橋(1983)、村木(1991)などがある。これらの二つの流れは、単語の認定の仕方による形態論的な分析において相違点はみられるものの<sup>1)</sup>、研究対象にしている形式に関して重要な指摘をしているといえよう。

以上の先行研究を見比べながら、新しい観点を提示することも大事であろうが、本稿では、研究上の立場として、鈴木(1972)の枠組みにしたがって考察を行う。

鈴木(1972)では、すでに紹介した後置詞に関する規定を提示しながら、後置詞を連用的なものと同体的なものに分けたうえで、以下の〈表1〉のように提示している。

1) 「日本語について」を例にすれば、鈴木(1972)では「日本語」の「に」の形「日本語に」に「ついて」がついているとみる。一方、永野(1953)では「日本語」に「について」がついているとみる。

〈表1〉連用・連体的な後置詞

後置詞と くみあわさる名詞の格	連 用 的	連 体 的
に 格	(…に) おいて (…に) ついて (…に) つき (…に) とって (…に) むかって (…に) よって (…に) 対して (…に) 関して	(…に) おける (…に) ついての  (…に) とつての (…に) むかっての (…に) よる (…に) 対する (…に) 関する
と 格	(…と) して (…と) いっしょに (…と) とともに	(…と) しての (…と) いっしょの
を 格	(…を) めぐって (…を) もって	(…を) めぐっての

鈴木(1972)の規定やその分け方からみると、後置詞の構文的な機能は、格助詞とほぼ同様であると考えられる。たとえば、「(～に) について」が「を格」と似た働きをしているとすれば、「を格」で示される単語と単語の関係、言いかえれば連語的な関係が成立すると考えられる。

以上のことから、後置詞の用法を調べる際には、ひとまず名詞のタイプと動詞（または形容詞）のタイプを確認し、そのむすびつき方の法則性を確認する必要性が出てくる。

続いて、高橋（1983a）は、動詞中止形の転成について述べている。そこで、動詞が後置詞化することによって、新しい類義関係が生まれることを指摘している。たとえば、次の「関して」「ついて」「めぐって」が互いに入れかえることができる（格助詞のとりかえもともなう）。

- ・結婚に**関して**、両親とのあいだにひんぱんな書簡の往復があった。
- ・かようにしてあらゆる文化について、**娛樂的な対しかた**というものができた。
- ・このホーキ星の分裂を**めぐって**、またも二つの見解が対立したこと…

そして、これらの後置詞の表す関係的な意味は、いずれも題目しめしであって、同じグループを成していると述べている。

一方、動詞の条件形から発達した後置詞に関しては、高橋（1983b）に大事なことが指摘されている。以下、少々長くなるが、高橋（1983b）を引用する。ここで注目していただきたいことは、（1）動詞の条件形から発達した後置詞には「とりたて性」があること、（2）条件形から発達した後置詞は、単語に対する関係を表すという連語的な性質からぬきだしていることである。

つぎの文には「みて」と「みると」があるが、これをいれかえると、ぎこちない文になる。

④甲の方からみて二点で同時におこったできごとは、乙の方からみると、同時ではないのである。

（湯川秀樹「物質世界の客観性について」）

これがおきかえられにくいのは、前者が連体句のなかにあつて分割のはたらきをおさえられることと、後者が、甲ではないというえらびだしのはたらきを<sup>2)</sup>になわせられることによるのだろう。

この文の「甲の方からみて」と「乙の方からみると」は、それぞれのあとにつづく句に対する意味的な関係がおなじである。つまり、それがおこるために必要な基準をしめしている。いいかえれば、どちらも名詞の格の形とくみあわさつて、他の文の部分に対する関係をあらわしている。ただ、「みると」の方は、その分割性によって、「単語に対する関係」という連語的な性格からは、ぬけだしている。

(高橋1983b : 296)

この記述をみると、少なくとも動詞の条件形から発達した後置詞の場合、名詞=単語と単語以上の単位をむすびつける性質をもっている形式と考えることができるようである。

以上の先行研究をもとにして、本稿では、〈表2〉のような枠組みを仮説として立てる。単語以上の単位としては、句、節、文といった単位が想定できるが、タイプ分けを単純にするために、単語と単語とをむすびつける場合と、単語と文とをむすびつける場合に設定する。

〈表2〉むすびつく単位及び語形による後置詞のタイプ分け

	中止形由来	条件形由来
単語と単語とをむすびつける	A	C
単語と文とをむすびつける	B	D

ここで、網掛けをしているAとDがそれぞれ中止形由来の後置詞と条件形由来の後置詞が主に分布していると予測されるタイプである。この予測の根拠を簡略に言えば、以下のようなものである。

本動詞が文法化を起こして文法的な形式に発達する場合、本動詞の語彙的・文法的な性格が保たれる現象が起こる<sup>3)</sup>。それで、中止形は本来二つの動詞が連なるとき、前の動詞がとる連用形の一つで、動詞と動詞=単語と単語とをむすびつける形式といえる。一方、条件形は、原因・理由を表す従属文とその結果を表す主文とをむすびつけるとき、従属文の述語がとる形である。条件形が後置詞へ文法化するとき、例4、5のように従属文はなくなり、単文を構成する要素となる。そのため、条件形由来の後置詞は、単語と文とをむすびつける形式であるといえる<sup>4)</sup>。

中止形由来の後置詞がAに集中しやすく、条件形由来の後置詞がDに集中しやすいとみる仮説は、これで説明がつくのではないかと思う。しかし、他のBとCタイプの場合、以上のような観点からは説明がつかない。本稿では、ひとまず、中止形由来と条件形由来の後置詞を区別する特徴を先に確認し、BとCタイプに関しては、その事例を確認する。

2) このえらびだしの性格がとりたて性につながる。

3) 詳しくは、Hopper(1991)、河(2019)を参照していただきたい。

4) 中止形からは「とんで帰る」のような様態副詞が発達し、条件形からは「実をいえば、お前に嘘をついていた」のような陳述副詞が発達するのも、このような性質とは無縁ではないだろう。

### 3. 研究資料及び研究方法

#### 3.1 研究資料

本稿では、戦後発表された、小説、論述文、新聞などから用例を収集している。今回の分析では、中止形由来の形式としては、「(～)について」「(～)にとって」「(～)に向かって」「(～)めぐって」「(～)からみて」を収集した。一方、条件形由来の形式としては、「みれば」「みると」「いえば」「いうと」「あげれば」「あげると」をもとにしている後置詞を収集した。

ただし、今回の分析では、議論を単純にするため、収集した用例のうち、「(～)については」「(～)にとっても」などのとりたての助詞がついている場合、「(～)についての」のような連体形は、本稿では対象外にする。

#### 3.2 研究方法

分析の観点としては、文のなかで、後置詞がくつつく名詞がどの構文的な要素とむすびつくのかを確認する。そのむすびつき方から、①単語と単語とのむすびつき、②単語と単語以上の単位のむすびつきに分ける。

すでに述べているように、中止形由来の後置詞は、本来の中止形の性格、つまり《連用》の性格をもっているため、①のむすびつきを実現する傾向をもつと考えられる。そこで、本稿では、①のむすびつきを実現する後置詞を確認しながら、中止形由来の後置詞を介してむすびつく名詞と動詞（まれに形容詞）の意味的なタイプを確認する。

一方、②のタイプの場合、①のタイプに属する後置詞の性格からみれば、周辺的な形式に位置づけられるだろう。本稿では、どんな形式が②のタイプに属するかを確認し、どんな構文的な特徴があるかまでを確認したい。たぶん、②のタイプに属する形式は、条件形由来の後置詞の用法を構文的な意味構造は類似していると思われる。しかし、中止形由来の後置詞の用法には、条件形由来の後置詞の用法とは違って、基本的に、《とりたて性》はないと予測される。それにしても、もし中止形由来の後置詞の用法に《とりたて性》が伴われるとしたら、その中止形由来の後置詞は、条件形由来の後置詞と言いかえが可能になるだろう。

そして、条件形由来の後置詞は、基本的に②のタイプに属すると考えられる。典型的には、「太郎からみれば、花子は日本一の美人だ」のように、「(～)からみれば」は、名詞と文<sup>5)</sup>とをむすびつけている。名詞の場合、いくつかの意味的なカテゴリーに分けることはできるが、名詞とむすびつく他の単位の意味的なカテゴリーは取り出しにくく、文レベルでの意味的なむすびつきを確認することになる。

5) 構文的な要素として《節》という用語もあるが、ここでは、「太郎からみれば、花子は日本一の美人だ」は、「花子は」を主語にし、「日本一の美人だ」を述語とする《文》を「太郎からみれば」という状況語で広げている構造としてみる。なお、この観点は、つきそい・あわせ文（いわゆる複文）は、つきそい文（従属文）といいおわり文（主文）からなるとみる考え方を引き継いでいる。

## 4. 分析

本節では、典型的に鈴木（1972）の規定にあてはまる、つまり名詞と他の単語との関係を示す機能をしている形式から述べていく。そして、中止形由来の形式であるにもかかわらず、鈴木（1972）の規定の外に置かれる後置詞の例を確認する。

### 4.1 中止形由来の後置詞

#### 4.1.1 「（～に）むかって」の場合

まず、「（～に）むかって」の用法は、名詞のタイプが①人名詞の場合と、②空間名詞の場合に分けることができる。これらの名詞のタイプにそって、その名詞とむすびつく動詞のタイプは法的に決まっているようである。名詞が人名詞の場合、むすびつく動詞は言語活動を表す動詞で、空間名詞の場合、むすびつく動詞は移動動作を表す動詞である。このむすびつきの中で、人名詞は言語活動の相手＝《対象》を表し、空間名詞は移動動作の目的地＝《対象》を表す。いずれの場合も《対象》を表しているため、「（～に）むかって」を「に格」の名詞に取りかえても構文上の意味関係に変わりはない。

- (8) すでに古く、法然上人はこのことに気がつかれたかのように、上人自身がいなくてどうもお弟子たちの間がうまくいかず、喧嘩が起りやすいことを気づかれ、お弟子たちに向かつて、「お前たちは、いっしょにいないで、離れている」といわれたそうである。（タテ）
- (9) 駅からきこえてくる列車到着の予告のアナウンスをききながら、あわてて玉をあつめ、景品にかえてホームにむかってまっしぐらに走った、という記憶もある。（パチ）

#### 4.1.2 「（～に）ついて」の場合

「（～に）ついて」の用法は広く知られているから、その意味・用法を詳しくは触れない。本稿では、名詞とむすびつく他の単語の構成面の特徴に注目する。今回の調査の限りでは、名詞とむすびつく他の単語には、①単一の単語の場合、②二つ以上の単語のくみあわせの場合がある。このような分類をすることによって、名詞とむすびつく他の単語というのは、単一の単語でなく、連語を成す単位として理解すべきであることを確認する。そして、「（～に）ついて」は典型的な中止形から発達した後置詞に属することも確認する。

##### ①単語の場合

日本語文法記述研究会（2009：45-46）に「（～に）ついて」が「考える」「思う」「認める」「調べる」などの思考活動の対象、「話す」「言う」「聞く」などの言語活動の対象を表していることが指摘されている。今回の調査でも、同様のタイプの動詞を確認している。

- (10) ここでは、まず、一体感について論じ、さらに第5章において内部組織について詳しく論ずることにする。（タテ）
- (11) たとえば、恋愛問題について悩んでいて、ため息をついてばかりいる人がいるとします。（脳）

多くの場合、「(～に) について」は名詞とその名詞を思考活動・言語活動の《対象》にする動詞とをむすびつける。そして、稀ではあるが、動詞の代わりに「無関心だ」「慎重だ」のように、ものごとに対する人・組織の態度を表す形容詞が用いられる場合もある<sup>6)</sup>。それにしても「(～に) について」が名詞と他の単語とをむすびつけていることに変わりもなければ、名詞がこれらの態度の《対象》であることにも変わりはない。

(12) こうした事態について専売公社も無関心ではありえなかった。(パチ)

(13) だからパチンコ業界がこの限界性についてきわめて慎重であって、つねにその微妙な境界線を真剣に研究しつづけているのは当然というべきであろう。(パチ)

## ②二単語以上のくみあわせの場合

「(～に) について」が名詞と二単語以上のくみあわせからなるフレーズとをむすびつける場合がある。二単語以上とはいえ、そのフレーズは一つの文の成分を成しているし、意味的なタイプも①と変わりが無いので、①の場合と同じく取り扱うことができる。

(14) したがって、ランダムだとわかってしまっている現象について、脳は、基本的に興味を失って無関心になります。(脳)

(15) そして、われわれふつうの人間はクギ師たちのこうした巧妙な作戦についてほとんど無知にちかいから、パチンコは「偶然のゲーム」にちかいものとなってゆく。(パチ)

(16) ちなみにフランス文学者の多田道太郎は、ストリート・ファッションについて思いがけない言葉をもたらしている。(てつ)

(17) 実際、進歩的思想の持ち主だとか、文化人と自他ともに認める人々や、大学で西欧の経済や社会について講義をしている教授たち、あるいは最先端をゆく大企業の中で働いている人々の中にも、(下略) (タテ)

以上のことから、鈴木(1972)の規定「その名詞の他の単語に対する関係を表すために…」の「単語」は一定の連語を成している単位として理解する必要があると思われる。そして、このことから、後置詞を介して名詞とむすびつく形式が連語の領域を超える場合、典型的な中止形から発達した後置詞ではなくなると考えられる。

### 4.1.3 「(～から) みて」の場合

今までとりあげた「(～に) むかって」「(～に) について」の場合、単語と単語、もしくは、単語と(意味的に)単語相当の単位とのむすびつきを実現するときに使われることを確認した。しかも、そのむすびつき方は法則的である。

しかし、ここであげる「(～から) みて」の場合、連語の領域を超えている。「(～から) みて」の構

6) 形式的には動詞であるが、意味的には形容詞のように人の特性を表す単語が用いられている場合もある。

・わたしはあれこれとあげつらってはいるものの、パチンコについてけっして熟達しているわけではない。(パチ)

文的な位置が主語と述語との間に置かれたりもする場合もあるが、意味的な構造からみれば、《判断・評価の根拠》と《ある物事に対する判断・評価》とをむすびつけている。

そして、「(～に) むかって」「(～に) ついて」は、もとの《連用》の性格を引き継いでいて、名詞と動詞（稀に形容詞）とをむすびつけるが、「(～から) みて」の場合、そのような《連用》の性格から解放されている。

(18) もし、世界の中の事象を規則的、ランダム、偶有的の三つに分けたとすれば、脳の感情のシステムから見て最も興味深い対象は、偶有的なものです。（脳）

(19) 翌日も朝八時ごろからまたバスにのって他の名所、旧跡を見物したり、買い物にでかけてゆく。旅行会社の発行しているスケジュール表をみると、これらの観光客たちにはまったく休む暇があたえられていないのである。こんな海外旅行のしかたは世界的常識からみていささか異常である。（パチ）

後述する条件形由来の後置詞の用法と比べていると、文の意味的な構造は同様である。それで、「みて」を「みれば」に言いかえても、文の意味構造に変わりはない。しかし、「みて」の場合、《とりたて性》がなく、名詞と他の構文要素とのシンタグマチックな関係のみを表す。

(19') こんな海外旅行のしかたは世界的常識からみていささか異常である。

→ 〈世界的な常識からみれば〉

例19'の「世界的な常識からみて」を「世界的な常識からみれば」に言いかえると、一般的には異常な旅行の仕方だが、文には現れていない誰かには通常のことでありうるという含意が伴われる。

#### 4.1.4 「(～に) とって」の場合

「(～に) とって」をめぐっては、佐伯 (1966) をはじめ、野村 (1984)、森田・松木 (1989)、三井 (2001)、杉本 (2006)、吉田 (2011) などがある。これらの先行研究の記述のなかで、「(～に) とって」の表す文法的な意味に関していえば、杉本 (2003) では《対比性》があげられたり、吉田 (2011) では他者は前提とされない《特立性》が指摘されたりしている。

「(～に) とって」が表す文法的な意味については、更なる考察が必要であるが、少なくとも、これらの研究の記述から確認できるのは、基本的に「(～に) とって」が使われる文は、ある物事に対する評価・判断を表す名詞述語文であるということである。

このことと関連した記述は先行研究から確認できる。野村 (1984) では、「(～に) とって」を伴う文は、主語についてのトータルな規定を述語とする判断文であることを指摘しており、吉田 (2011) でも、評価的な判断を表す名詞述語文が基本的であることを述べている。また、このような文のタイプと関連した記述として、森田・松木 (1989) では、判断や評価を成立させる立場・視点を表す表現で、“～の身から見て”の意味で主に人名詞を受けることを指摘している。

今回の調査で得られた用例をみると、以下のようなものが確認される。

(19) ひとことでいえば、わたしにとってパチンコとは学問と実益の両面をかねそなえた抵抗しがた

い遊びだったのである。(パチ)

(20) 現代の若いひとにとって二十歳の成人式というのはまったく形式的なものだ。(てつ)

(21) だから、西洋人のように、二週間とかひと月とか、まとまった休暇をとって旅行にでかけた  
り、別荘で夏をすごしたり、という大量の時間を「余暇」としてもつことは、日本人にとって現  
實的に困難なのである。(パチ)

また、次のように、「(～に) にとって」が連体修飾句を構成する場合がある。このとき、名詞は規定語  
(連体修飾語)とむすびついている。両要素間の法則的なむすびつき方が確認されなければ、このよ  
うなタイプは上記のタイプから派生したものとみてもよさそうだろうが、実際にどのような位置づけにす  
るかは今後の課題にする。

(22) 東北の小さな駅の待合室でぼんやりと一時間を過ごすというのは、われら日本人の多くにとっ  
て、耐えがたい時間の空白感をともなうのだ。(パチ)

(23) 主体性の知覚とは、すなわち、自分にとってコントロール可能なものの範囲を認識すること  
で。(脳)

(24) ここで重要なのは、「偶有性」は本来価値中立的なものであるということです。「偶有性」は、人  
間の創造性やコミュニケーションなど、ポジティブな脳の働きと結びついている一方で、生命に  
とって否定的な作用をもつ変化に結びつく可能性もあります。(脳)

少なくとも、「(～に) にとって」の場合も「(～から) みて」と同じく、単語と単語以上の単位をむす  
びつける、つまり連語の領域を超えているといえそうである。

## 4.2 条件形由来の後置詞

条件形由来の後置詞の場合、中止形由来の後置詞とは違って、くつつく名詞の形式にバリエーション  
がある。本稿では、紙幅のために、便宜的に「(～から) みれば/みると」と「(～を) あげれば/あげる  
と」の用法を中心にとりあげる。

### 4.2.1 「(～から) みれば/みると」の場合

周知のごとく、「(～から) みれば/みると」は、ある物事について判断・評価したことを述べると  
き、その判断・評価の《立場》、《判断材料》を表すときに用いられる(河2012a: 608)。

「(～から) みれば」がくつつく名詞が人名詞か、それに準ずるもの(「～の視点」「～目」「～立  
場」)であれば《立場》を表し、様子や状況を表す名詞であれば《判断材料》を表す法則性はみられる。  
だが、いずれにせよ、これらの名詞がむすびつくのは、文である<sup>7)</sup>。

(25) 戦は、私からみれば羨ましいような男であった。頭はよく、姿はよく、動作は機敏で、なによ

7) 次のように、形式的に主語が明示されていない場合もあるが、コンテキストから述語に対応する主語は補  
うことができる。以下の例では「札幌は」を補うことができる。

・「札幌の人間が聞いたら、それは吹き出すよ。だが、そうは言っても、まあ東京からみればまだまだ田舎だ  
からねえ」(塩狩)

りも日本語がひどく巧みで…。(忍ぶ)

- (26) 1962年と83年の噴火も経験したが、この日の噴火は、島の被害から見ると、溶岩が流れなくても最悪だった。(毎日新聞000913・夕刊総合面)

ちなみに「(～から) みれば/みると」だけでなく、「(～から) いえば/いうと」の例からも同様の用法は確認できる(河2012b:438~439)<sup>8)</sup>。

- (27) 七月一日に実施された公定歩合引き下げに伴い、同月二十九日から規制金利の預金金利が下がった。預ける立場からいえば、あまり楽しいことではないが、それにつれて借りる金利の方も引き下げが行われる。(毎日新聞910811・経済面)

- (28) それにしても頭だけ下げて安閑としているわけにはいかない。好寿院の月謝は前期が一円三十銭、後期が一円五十銭であったが、ほかに顕微鏡、屍体実験料として月額五十銭を徴収された。これに下宿料三円から四円を加えると前期生で一カ月七、八円、後期生では約十円が必要であった。友子からの三円を貰い続けたとしてもすでに生活はやっていけない状態になっていた。(中略) 一カ月もせぬうちに荻江は三軒の内職先を見つけてくれた。/「どれも良家で、今の家庭教師の相場からいうとかなり良い方です」(花)

#### 4.2.2 「(～を) あげれば/あげると」の場合

「みれば/みると」「いえば/いうと」の後置詞の用法に比べて、「あげれば」「あげると」の後置詞の用法は限られているように思われる。「みれば/みると」「いえば/いうと」の場合、すでにとりあげた「から」の形の名詞のほかにも、「を」や「で」の形の名詞ともくみあわさりながら、後続する文との関係のなかで様々な意味を表す。しかし、「あげれば/あげると」の場合、「を」の形の名詞とくみあわさる。

そして、「(～を) あげれば/あげると」は、あるカテゴリーに属するものを列挙するときのみ使われる。名詞とくみあわさる形式が限られているとはいえ、条件形由来の後置詞であるためか、名詞がむすびつくのは文である。

しかし、ここで注目したいのは、名詞がむすびつくのが文であるとはいえ、その文というのは、名詞が表すその《集合》に属する《要素》の存在を列挙しており、述語は「ある」「並ぶ」だけが確認されている点である。

- (29) 今、経済がダメになってくるとアイデンティティーを失ったようになる。こうした日本人の原動力というものを、ランキングを見てどう感じますか。一方で、応用技術はうまいがクリエイティビティーはないと言われる。でも、日本発の物を挙げると、アニメ、ヘッドホンステレオ、カラオケなどたくさんあります。(毎日新聞011228・特集面)

- (30) このヒッピーの性格であるボヘミアンとヤッピーが手にしたブルジョア文化が、一人の人間の中で混じりあった存在が「BOBO」であり、その総称が「BOBOS」なのである。「私たちにも馴染みのある名前をあげると、ビル・ゲイツ、スティーブ・ジョブズ、スティーブ・スピルバーグ、

8) いずれの例も主語は明示されていないが、コンテキストから「預金金利の下がったことは」「月謝は」とかを入れることができる。

ビル・クリントンと、政治経済文化のあらゆる側面で現代のアメリカ社会をリードする“新上流階級”が並ぶ。(毎日新聞021124・読書面)

すると、「(～を) あげれば/あげると」の役割は、他の条件形由来の後置詞と同じであるが、述語のタイプには何らかの意味的なタイプがあるのではないかと思われる。

## 5. まとめと今後の課題

### 5.1 まとめ

以上、本稿では、動詞の中止形と条件形から後置詞に文法化するが、それぞれ構文的な機能が異なっていることを確認した。その内容をまとめると、以下の〈表3〉のようである。

〈表3〉中止形及び条件形由来の後置詞の構文的な特徴

《後置詞》	
名詞の形とくみあわさって、その名詞の他の単語、もしくは文に対する関係を表す	
中止形由来の後置詞	条件形由来の後置詞
名詞の格の形とくみあわさって、他の単語との関係を表し、連語のような法則性がある。	名詞の格の形とくみあわさって、文との関係を表す。連語のような法則性は取り出せない。
名詞と他の単語との関係 シンタグマチックな関係のみを表す。	名詞と文との関係 文中に現れていない同類のものごととの関係を表す《とりたて性》をもつ。

そして、中止形由来の後置詞のうち、「(～から) みて」「(～に) とって」の場合、名詞と文とをむすびつけていて、条件形由来の後置詞のような機能をする。しかし、構文上の要素間の関係のみを表しているため、《とりたて性》はない。

一方、条件形由来の後置詞のうち、「(～を) あげれば/あげると」の場合、ある集団に属する要素の存在を列挙するため、「ある」「並ぶ」のように、限られた動詞が確認される。

### 5.2 今後の課題

まず、中止形から派生した後置詞の用法を調べ、それらの後置詞の連語的な性格、つまり名詞と動詞・形容詞との法則的な意味関係を確認する。このような作業をすることによって、典型的な中止形からの後置詞の性質が明確になってくると思う。一方、条件形から派生した後置詞の用法を調べながら、中止形由来の後置詞には見られない構文的な性質を確認したいと思う。

### 【参考文献】

河在必 (2012a) 「視覚活動を表す動詞「みる」の条件形の派生的な用法」『日語日文学研究』82(1)

- pp.599-618
- (2012b) 「言語活動を表す動詞「いう」の条件形の脱動詞化」『日語日文學研究』83(1) pp.429-448
- (2014) 「転移動詞「あげる」の条件形の文法化と語彙化—「あげると」「あげれば」の形の場合」『日本言語文化』28 pp.121-146
- (2019) 「脱動詞化にみられる文法的な意味と機能の存続—動詞条件形の脱動詞化を中心に—」『日本研究』51 pp.113-131
- 奥田靖雄 (1992) 「動詞論」奥田靖雄著作集刊行委員会編 (2015) 『奥田靖雄著作集 言語学編 (3)』に所収 pp.5-114
- 言語学研究会編 (1983) 『日本語文法・連語論 (資料編)』むぎ書房 pp.3-19
- 佐伯哲夫 (1966) 「複合格助詞について」『言語生活』178 筑摩書店 pp.80-88
- 杉本 武 (2003) 「複合格助詞「にとって」について」『文藝言語研究. 言語編』44 筑波大学 pp.79-100
- 鈴木重幸 (1972) 『日本語文法・形態論』むぎ書房 pp.499-502
- 高橋太郎 (1983a) 「構造と機能と意味—動詞中止形(～シテ)とその転成をめぐって—」『日本語学』2(1) 2 明治書院 pp.73-81
- (1983b) 「動詞の条件形の後置詞化」渡辺実編『副用語の研究』明治書院 pp.293-316
- 永野賢 (1953) 「表現文法の問題—複合辞の認定について—」金田一博士古稀記念論文集刊行会編『金田一博士古稀記念 言語民族論叢』三省堂 pp.95-120
- 日本語文法記述研究会編 (2009) 『現代日本語文法2 第3部格と構文 第4部ヴォイス』くろしお出版 pp.29-106
- 野村剛史 (1984) 「～にとって/～において/～によって」『日本語学』3-10 明治書院 pp.60-66
- 藤田保幸・山崎誠編 (2006) 『複合辞研究の現在』和泉書院 pp.3-19
- (1990) 「複合辞の認定基準・尺度設定の試み」『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』2 pp.27-52
- 三井正孝 (2001) 「ニトツテ格の共起条件」『新潟大学国語国文学会誌』43 新潟大学 pp.12-38
- 村木新次郎 (1991) 『日本語動詞の諸相』ひつじ書房 pp.325-337
- 森田良行・松木正恵 (1989) 『日本語表現文型』アルク pp.1-318
- 吉田玲子 (2011) 「XニトツテAハB」に関する考察」『日本學報』87 韓国日本学会 pp.27-38
- Hopper, Paul. (1991) On some principles of grammaticalization. In: Elizabeth Closs Traugott and Bernd Heine (eds.), *Approaches to Grammaticalization*, vol. 1 John Benjamins pp.17-35

## 【用例出典】

- 【小説】赤川次郎『シングル』/小松左京『日本沈没 (下)』/三浦綾子『塩狩峠』/三浦哲郎『忍ぶ川』/群ようこ『無印結婚物語』/渡辺淳一『花埋み』
- 【論述文】加藤秀俊『パチンコと日本人』/中根千枝『タテ社会の人間関係』/茂木健一郎『「脳」整理法』/鷺田清一『てつがくを着て、まちを歩こう—ファッション考現学』

## 〈 요지 〉

### 현대일본어의 동사에서 유래한 <<후치사>>에 관하여 - 구문적 기능을 바탕으로 한 후치사의 분류 -

현대 일본어에는 동사가 탈동사화하여 발생한 후치사가 있다. 후치사의 근원이 되는 동사의 어형로는 기본적으로 비종지의 위치에서 쓰이는 <<중지형>>과 <<조건형>>이 있다. 지금까지의 연구에서는 이러한 두 어형에서 발생한 후치사에 대한 존재는 인식하고 있으면서도, 어형에 따른 구문적인 연결방식의 차이에 관해서는 주목하지 않았다.

이에 본고에서는 후치사를 구문적인 연결방식에 따라 네 가지 타입으로 나누고 동사 중지형에서 유래한 후치사와 동사 조건형에서 유래한 후치사가 각각 어떠한 타입에 분포하고 있는지를 조사하였다.

그 결과 동사 중지형에서 유래한 후치사는 동사를 중심으로 한 동사·형용사, 즉 단어레벨에서 연계하는 것을 확인하였다. 그리고 동사 조건형에서 유래한 후치사는 단어가 아니라 문장에 상당하는 레벨에서 연계하는 것을 확인하였다.

이렇게 동사의 어형에 따라 연계방식에 차이가 나타나는 원인은 본래의 동사 어형이 갖는 구문적인 성질에 있다. 우선 동사 중지형은 운동을 나타내는 두 동사를 연계시키기 위해 발달한 동사 어형으로 이러한 성격이 문법화가 된 이후에도 남아있다고 볼 수 있다. 한편 동사 조건형은 사건을 나타내는 두 문장을 연계시키기 위해 만들어진 어형으로 문법화가 일어난 이후에도 문장과 연계되는 성격을 지니고 있다고 생각할 수 있다.

논문분야 : 구문론

키워드 : 후치사, 문법화, 동사조건형, 동사중지형, 탈동사화

#### ■ 하재필(河在必)

한국외국어대학교 조교수

hajp75@hufs.ac.kr

■ 投稿日 :	2019년	7월	6일
■ 審査開始 :	2019년	7월	17일
■ 審査完了 :	2019년	8월	8일
■ 掲載確定 :	2019년	8월	9일